ISSN 0289－8624

写真　総会、講演会「映像表現力を育成する指導方法を身につける」　　題字・デザイン　吉田貞介氏

石川県教育工学研究会　　2011.8.1　　第81号

タブレットＰＣがやってきた

事務局長・内灘町立清湖小学校　飯　田　淳　一

内灘町の２校の小学校に、タブレットＰＣと電子黒板（通称ＩＷＢ）がど～んとやってきた。

１校は大根布小学校。全国で10校の「フューチャースクール実証校」である。ICT を利活用した協働教育と情報化の先進的な事例を集め、手引き書を作成することが主な目的だそうだ。

もう１校は、私の勤務校である清湖小学校。同じく総務省のプロジェクトではあるが、「地域雇用創造 ICT 絆プロジェクト」の、全国46校の中の一つだ。こちらは ICT 支援員や教育コーディネータの配置などで地域の人材を活用し、教育分野での雇用創出や ICT 環境の構築による教育分野の情報化の推進が目的である。

どちらの学校にも、普通教室に電子黒板と先生機、そしてタブレットＰＣ（大根布小は全校児童分の約400台、清湖小には４年生以上で約150台）が整備され、支援員も配置されている。

導入の目的は違っても、これらの機器の良さを活かして、児童の力を伸ばしていくことには変わりはない。ペンで書ける良さ、画面を共有できる良さ、資料（特に写真や動画）を手元で見せたり、自分で選ばせたりできる良さ、カメラやマイクが初めからついている良さなど、紙ベースの学習ではやりにくかったり、面倒だったりしたことも簡単に実現できる。

これまでもパソコン室へ移動すれば、紙を超えるような活用はできたが、それはわりと機器に抵抗のない教師に限られていた感がある。しかし、パソコン室にぞろぞろと引き連れて行かなくてもよくなった。普段の教室で、ほんの５分間だけＰＣを使う、というようなさりげないちょこっと使いができることはとても大きい。その際、支援員は、機器が得意でない教師にもそのクラスの児童にも大きな存在である。

本校では使い始めてまだ３ヶ月足らずだが、教師にとってこれまでの授業スタイルに大きな変化をもたらすかと思えばそうでもない。ただ確かに言えるのは、これら機器を活用しようとすると教材研究をしっかりしなければならないということだ。

積極的に ICT を使おうとする教師の授業力は確実に高まると、若手の教師を見て感じている。

「伝えたい」「学びたい」が学習者から生まれる、小学６年生英語学習活動の実践的研究

－台湾との学校間交流学習による対話活動の促進－

金沢市立浅野川小学校　西野聡子

１．「伝えたい」「学びたい」の意欲を創出

小学校６年生の発達段階では、英語学習において自己表現を行うことに消極的な言動になる傾向がある。そこで、学ぶ必要感をもたせるために、児童と同世代であること、英語力に差が生じにくいことを条件とする、台湾の小学４年生との交流学習を、英語学習の中に取り入れることにした。これらの学習は、メールやTV会議システムを利用し、写真や手紙を送り合ったり、直に対話を行ったりすることで、自分達が学んだ英語力を試したり、学習したことを生かしてもっと相手を理解しようとする活動に発展させていくものである。また交流学習を、英語でのやりとりで終えるのではなく、交流相手のクラスと、１枚の絵を仕上げるJEANのプロジェクトの一つである「アートマイルプロジェクト」に参加し、双方で交流した内容を、１枚の大きな壁画にして残すこととした。

２．「伝える力」を創出するために

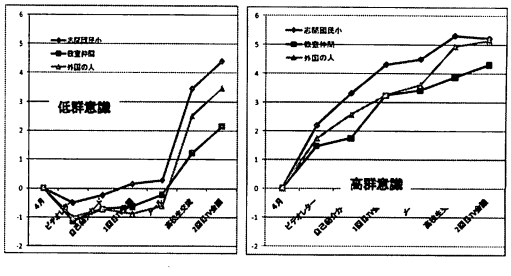
教師による３つの英語学習設計を行い、交流学習と絡めた。１つ目は、小学校で毎朝行う健康観察を、リズミカルに英語で伝えるようにした。"Hi, How are you?" "I'm fine." のように、決まった言い方をくり返すだけの活動は、児童に英語を話すことができる安心感を与え、自信を持って話す手立てとなった。また、発話をくり返すうちにもっと他の表現を「学びたい」、他の表現で「伝えたい」という思いが生まれ、それに伴って自分達で調べてくる姿が見られた。

２つ目のショートタイム（英語を学ぶ週１回の朝学習）は、英語学習の復習にあてられるが、交流学習を絡めることで、教科書の内容に留まらず、「交流相手の○○さんにこんな話を伝えたいから、何て言えばいいかな。」など、学ぶ内容が具体化し、児童が自ら「伝えたい」「学びたい」の思いが学習活動の柱となり理解度も向上した。

３つ目として、週に１回行う英語の授業では、教科書を使用し、日本を紹介する単元や学校を紹介する単元に、「台湾の交流相手に紹介する」という明確な相手意識をもたせたことで、児童の「学びたい」というモチベーションを、格段に上げることができた。

３．「伝えたい」「学びたい」の意識の変容

以上の３つの学習活動を取り入れた交流学習を行った後、児童に交流相手、クラスメイト、初対面の外国の人と対話する自信がどのように変化したか、運勢ライン法（Richard 1995）により分析を行った。４月の英語で対話する自信を起点として、交流学習を進める経緯で、自信が上がったり下がったりしている。



低群意識と高群意識の児童双方での共通点は、交流学習の終わりに高い自信をもったことである。着目したいのは、アメリカから訪問した高校生と対話する経験で、これまでの学習を生かし、また英語の語彙を十分に使えなくても身振り手振りで工夫すれば伝わることへの自信を、とくに低群意識の児童が感じていることである。

これらの実践により、英語学習に交流学習を絡めることで、英語学習に対する学ぶ意欲を育てることにつながることが明らかになった。

※岡本夏木「ことばと発達」1985
Richard White「子どもの学びをさぐる」1995

大型テレビを用いたテレビ会議を通してのコミュニケーション能力の育成

－東エルサレムとの交流学習を通して－

金沢市立四十万小学校　余川　慶

1．コミュニケーション能力とは

よく「コミュニケーション」と言うが、わかりやすく定義すると次のようになる。

「感情を互いに理解しあい、意味を互いに理解しあう能力。感情面に気を配って、意味をわかちあい、信頼関係を築いてゆく能力。」（齋藤孝『コミュニケーション力』岩波新書 2004年）

２文目の「感情面に…」という部分については、人付き合いの基盤となる大切な部分であり、その一方で、日々の生活や社会全体の風潮を考えたときに、確かに希薄になってきているという印象を持った。小学校教諭として、このコミュニケーション能力の育成を指導できる立場として、ぜひ身につけさせたい力であると感じた。

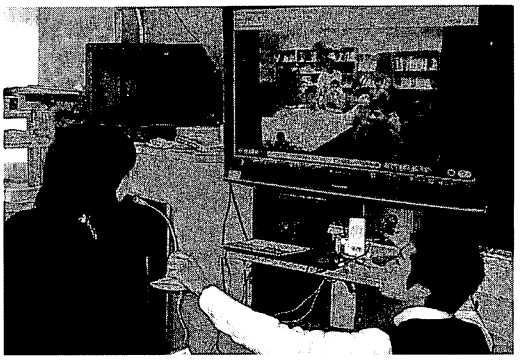
2．コミュニケーション能力育成のために

具体的な取り組みとして、アートマイル活動を媒介とした東エルサレムの子供たちとのテレビ会議を行うこととした。名前も顔も知らない外国の子供たちとの交流であるが、これから共にアートマイル活動を進めていく大切な仲間でもあり、仲良くなりたいという意識があった。また、これまで学習してきた英語を使っての交流ができることも、良い経験となった。世界中のどんな人とも、英語を使うことでコミュニケーションが図れる、そしてテレビ会議という方法で、相手の表情を見ながら会話ができることで、雰囲気というか空気のようなものを感じながらの会話ができることから、コミュニケーション育成のためには大変有効な方法であると言える。

3．テレビ会議の様子から

事前の練習をふまえて、実際に東エルサレムの子供たちとテレビ会議をしたときは、webカメラをしっかり見て、マイクに顔を近づけて、前のめりになって話している児童が見られるようになった。しかし、ゆっくり、はっきり、語尾までしっかりと言わなければ相手に伝わらないということがまだよく理解できていない児童も多く、自分の話し方がそれで良いかどうかを判断できない児童も見られた。

相手の言うこともなかなか理解できないことが多かったが、雰囲気を感じて温かい反応を返すというコミュニケーションの基本となる心を養うことは、十分できていたと感じる。



4．成果と課題

この取り組みの成果として次の２点を挙げる。

① いろいろな英語活動を体験できて、英語に親しむことができた。

② 相手を意識して話すこと、どうすればうまく伝わるのかを考えることができた。

課題は、次の２点である。

① 映像と音声でよりよく伝えるためにはまだまだ工夫が必要であり、それが可能であること。

② 気付いたこと、身につけたことを日々の生活ににどのようにフィードバックさせていくか。

今回の活動を通して、人とコミュニケーションをとることの楽しさ、すばらしさを体験できたということが、子供たちにとって何よりの経験であったのではないかと思う。

国際交流学習実現のための研究会における留意点

金沢星稜大学　清 水 和 久

1．はじめに

国際交流学習において成果として、教師には、「授業設計力や相手校との交渉力の高まり」、児童生徒には「異文化理解や、相手校との共同成果物の作成による達成感の深まり」が期待される。これらの期待される成果ふまえて国際交流を行う教師をサポートするために研究会を開催し、必要とされるサポート体制の明確化と、国際交流を行う教師が重要視している活動内容を構造化しようと考えて本研究に取り組んだ。

2．研究のねらいと方法

国際共同壁画制作プロジェクトを運用する上で研究会の役割を明らかにするとともに、参加した教師の意識として価値づけられる交流上の項目を構造化して表す。方法としては研究会に参加した教師18人にアンケート調査を行った。

3．研究の結果

(1)　研究会としてのサポート体制の確立

本プロジェクトは、県内の教員で構成する月１回の研究会において細かいサポートが可能である。参加教師の感想からは情報交換と課題共有の場としてのニーズで研究会において一番求められていることが分かった。

(2)　研究会参加教師の評価調査から（N=18）

①　教師からみた児童の変容

・外国及び外国人への関心が高まった（12人）
・英語の必要感が高まった点（４人）

②　教師のプロジェクトに対する課題点の考察

プロジェクトに参加した教師の評価は６段階間評価で「６が６人、５が７人、４が５人」（４以上が肯定的評価）であった。ところが、「他の教師にこのプロジェクトを勧めたいか？」を問うた場合「６が４人、５が５人、４が８人、３が１人」であった、この違いは、プロジェクトとしての価値を認めつつも、実行には困難があることを結果として表している。そこで困難点を列挙してもらった。理由としては、金銭的問題、時間的問題、道具的問題が上げられた。時間的な問題の解決法としては、他教科と関連させた時間を確保することで時間の確保をする。また、交流の道具の使い方としては、TV 会議用の skype 等の研究会での実習体験が必要である。

③　教師が価値づけた項目の構造図の作成

プロジェクトに参加した教師が価値を認めている項目について、児童と教師に関わるものを横軸に、交流活動自体と協働画の作成を縦軸にして活動の分布図を時系列も考慮して教師のアンケートより作成した。

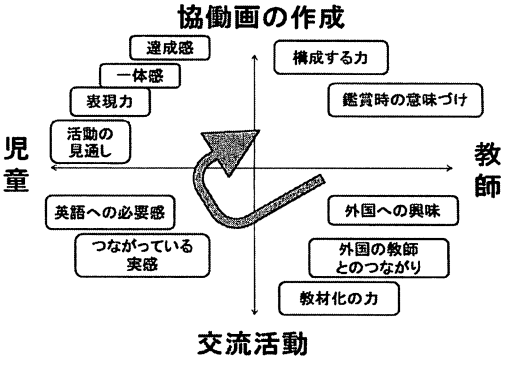


図１　教師が活動において価値づけた項目

スタートは教師の強い外国への関心が必要であり、外国の教師とのつながりを深めることで、対象国を教材化する力が必要となる。活動が始まると、児童に英語に対する必要感を高め、途中では、相手と交流している実感を持たせることで、表現力、一体感、達成感を味あわせていく事がキーポイントになってくる。絵の協働作業というゴールを提示することで児童自らが動き出し、教師と共にその過程を創造していくことができ、自分達の活動の意義を理解できるようになると考える。

活動の最後には教師の出場として絵を構成する力や、完成した作品を通して交流国の異文化理解や、活動自体の意味づけに価値を置いてくことが分かった。

3年生書写における筆づかいの定着のためのコンテンツ活用

内灘町立清湖小学校　飯田淳一

1．はじめに

4月から石川県書写書道教育連盟が作成した書写のデジタルコンテンツ「書く蔵くん」を活用し、教室の50インチの大型ディスプレイで提示して取り組んできた。

10月の単元「ビル」の作品を見てみると、この題材での学習内容はできている児童が多いが、これまで学習したはずの筆づかいが定着していない児童が見られた。そこで、筆づかいを確かめながらこれまでの復習をし、定着を図る学習単元を設定した。書写における活用力を意識しそれぞれが大切にしたい一文字を選び、必要感をもたせて取り組んだ。

2．実　践

(1)　自分が大切にしたい字を選ぶ

これまで習った漢字の中から、大切にしたい漢字1文字を自分で選ばせた。

(2)　自分の手本を作る

教科書の巻末に付いている毛筆の書体を手本にした。スキャナでパソコンに取り込み、画面上に拡大してワークシートに写させた。

(3)　自分の必要に応じて筆づかいを確認する

必要に応じて自分でコンテンツを見させた。書きたい字に必要な筆づかいを自分で選び、納得がいくまで何回も見ている姿、墨をつけていない筆でコンテンツと一緒に画面をなぞって、真似ている姿が見られた。（写真）

画面を筆でなぞって確認

3．結　果

(1)　自分が大切にしたい字を選ぶことについて

約8割の児童が「楽しかった」を選んでおり、自分の書きたい字を考え、選ぶことはよかった。

(2)　自分の手本を作ることについて

かご書きをして手本を作るという作業について、難しかったと感じる児童がとても多かった。画が重なっている部分の始筆をとらえられていない児童がとても多いことがわかった。しかし始筆の筆の形を書き入れさせたことで、穂先の角度の45°をより意識させることができた。

(3)　自分の必要に応じて、筆づかいを確認して書くことについて

「楽しかった」（32人中30人）、「わかりやすかった」（32人中28人）と感じている児童がほとんどで、コンテンツを児童が活用することは意欲の面、理解の面でも効果があったといえる。これまで教師がパソコンを操作して見せていたのだが、児童が自分で見たいところを選んで何回も見たり、画面を筆でなぞって練習をしたりして、コンテンツに能動的に関わると、より意欲が高まり理解が深まることがわかった。

コンテンツ活用前と活用後

作品を見てみると、線が太くなっている児童が多い。運筆の様子をすぐ目の前で確認しながら手を動かすことで納得ができたと思われる。教室の前面の離れたところの画面で見るよりも、手元のパソコン画面で見ながら、しかも自分の筆づかいと比べながら見る方が確認しやすく理解しやすいのは明らかである。

自分の字の変化に気づいている児童も多く、児童が必要に応じて自らコンテンツを活用することは、筆づかいを定着させ、自力解決する学習のために役に立つと言える。

今回の実践をふまえ、改善を図りながら、今後に活かしていきたい。

白山支部活動報告

白山市立明光小学校　正來　洋

1．月例学習会を開催

2011年度の白山支部は本年度も9名のメンバーにて4月にスタートしました。細く長くを目標に活動を続けてきましたが、思えば1997年度に地区の小さなサークルとして活動を始めて15周年ということになります。メンバーも年を追うごとに少しずつ入れ替わりはありますが、現在のメンバーはいずれも5年以上ともに学習を続けている仲間ということになります。初期には2か月に一度、近年は月に一度の例会をメンバーの所属校持ち回りで開催し、さらにメーリングリスト上でも情報交換を進めてきた白山支部です。

今年度はメンバーの異動なども多くあり、スケジュールがなかなか合わないこともありましたが、また息長く活動を続けていく予定です。以下、今年の活動の予定を記します。

2．Ichigo 読書

初期によく行っていた「アウトプットするためにインプットを大切に」ということで「Ichigo 読書」と称する読書会を復活する予定です。

日頃購入はするがなかなか読めないでいる教育書・ビジネス書を参加メンバーが持ち寄ります。ストップウォッチで計時し、15分で読書、2分で概要をまとめ、各自3分間のインプレッション発表、それに対するメンバー間のディスカッションを3分…という形で進めます。

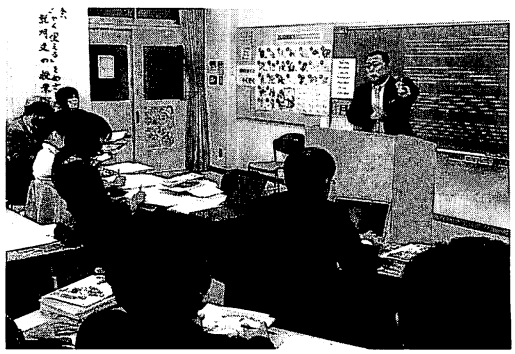
この読書セッションのメリットは、毎回たくさんの書籍が紹介されることです。

しかしそれ以上メリットは、このセッションが「3分で書評する」ことを意識して、本のどこが「売り」なのか、筆者の意図はどこにあり、それに対してどのような印象や意見を持ったかを端的に「まとめて・発表する」ことを参加者に求める点にあります。

内容を網羅的・羅列的に紹介するだけでは冗長となって聞き手には伝わらないということに気づきます。発表内容の切り取り方や意見の絡ませ方に意識的になっていくという部分に、参加メンバーの学びがありました。これは日々の教師としての話の焦点化という点でもよい訓練であると感じます。

3．教育の最新情報を学ぶ

昨年度は新学習指導要領への本格移行を前にした学習を進めることをめあてに二つの学習会を本支部が担当して行いました。



2010冬 算数新教科書学習会より

一つ目は、11月中旬に野々市町立御園小学校で行われた東京書籍編集局数学編集部の小学算数編集長 小笠原　敏成氏を迎えての新教科書の指導法についての学習会でした。二つ目は、同じく12月に御園小学校を会場に開催された光村図書国語科編集長　飯田順子氏を迎えての新教科書の指導法を学ぶ学習会でした。

どちらの学習会も現場教員の関心の高さを反映して定員をはるかに超えた参加者を迎えることができました。また、学習の質的な変化はもちろん、内容量の「大幅増」の意図とその実際が具体的に示され、現場教員として何に備えるべきかをよく学ぶことができたと好評を持って終わることができました。

今年度も Ichigo 読書でのインプットと合わせ、支部の学習会の継続をしていきたいと考えています。

今年度の金沢支部の活動 金沢星稜大学生とのコラボを目指して

金沢星稜大学 清水和久

1．はじめに

金沢支部では一昨年度から活動の中心になっている国際交流学習を本年度も行っていく。今年度は、金沢星稜大学のこども学科の一年生を中心とした「SKIP」のメンバーとのコラボレーションでの研究会活動を行う予定である。

2．大学生とのコラボレーション

図1　星稜大学 SKIP メンバー

SKIP という団体は、金沢星稜大学の学生の企画に金銭的援助を行う「星稜JUMP プロジェクト」に採用された企画を行う団体で、自らも国際交流活動を行いたいと願っている。今年度は金沢市内の小学校の国際交流活動に支援を行ってくれることになっている。また、彼ら自身も、国際共同壁画作成プロジェクトに参加する予定で、現在ロシアまたはエジプトの高校生との交流が予定されている。同時に金沢市内で同プロジェクトに参加する小学校への英訳の援助活動、並びに12月末に行われる金沢21世紀美術館での国際共同壁画の展示の企画や運営も行う予定である。教師の卵である大学生に国際交流学習のサポートに参加してもらえるのはとても有意義であり、彼らにとっても役に立つことである。

3．支部の活動の内容

月１回程度研究会を持ち，互いの国際交流プロジェクトの進行具合を報告すると共に，実際の国際交流の前にその練習として国内の児童同士の交流も行う。

＜国際交流の４段階＞

第１段階（９月10月）自己紹介や学校紹介
第２段階（10月11月）テーマ構図
第３段階（12月１月）具体物の作成
第４段階（２月３月）鑑賞と振り返り。

この４つの段階に合わせて研究会の活動も進めていく予定である。特に１、２段階目が重要であり、教師同士の信頼関係ができているとこれ以降の交流がスムーズになる。

＜県内からのプロジェクトの参加校＞

８校17クラスが参加予定である。

金沢市立花園小６年	１クラス
金沢市立四十万小６年	３クラス
金沢市立額小学校６年	３クラス
金沢市立金石小６年	２クラス
金沢市立西小学校５年	２クラス
金沢市小坂小学校１年	２グループ
七尾市立天神山小学校	３クラス
金沢星稜大学	１クラス

4．７月までの活動

○第１回学習会６月６日(月)

JICA の青年海外協力隊員のシリア美術教育担当の塩井美帆先生をお呼びして、国際交流についての講演会を実施。塩井氏は2006年に金沢市立扇台小学校においてシリアとの国際共同壁画制作プロジェクトで図工担当として参加しており、この経験がシリア赴任へとつながる事になった。現在はシリアの情勢不安によってヨルダンへの赴任予定とのことである。

○第２回目学習会７月４日(月)

昨年度実施した国際交流学習の事例の紹介、skype での TV 会議の体験、youtube への動画の投稿の方法の説明もおこなった。skype の実演が国内の中学生と星稜大学の学生との間で行なわれ、研究会初参加の先生方にも充分わくわく感が伝わったようであった。

○９月以降の予定

９月から本格的な交流活動が始まる。８月中には相手が決まるため、まずは、ペアーの先生同士のコミュニケーションを確立させることが急務となる。その後自己紹介や TV 会議の打ち合わせに入っていく

2011年度授業力向上ゼミ　レポート

金沢市立小坂小学校　室本眞希

第１回（4/21）金沢大学　加藤隆弘准教授

第１回目は、「４月だからこそ考えたい学級づくり」というテーマで行われた。講師は加藤先生（金沢大学）。

金沢市を始め、石川県内の多くの学校研究に指導・助言という立場でかかわっている加藤先生だからこそできるテーマである。

ワークショップでは、「４月に大事にしたいこと」などを、まずは、グループ内の一人一人が付箋紙に書き出す。次に、それらの付箋紙をもとに、意見交流しながらグルーピングしていく。

そうすると、よく似たことをグループ内のメンバーもしている場合が多い。しかし、その目的や手法が異なる場合がある。実におもしろい。その一方で、全く考えの及ばなかった内容なども他のメンバーから出されると、「あ～なるほど！」と納得してしまう。

１グループ４名という少人数だからこそ、活発な意見のやりとりが生まれ、多くの新たな気づきが生まれた。

第２回（5/15）小坂小学校　細川都司恵教頭

第２回目に登壇するのは、細川先生（金沢市立小坂小学校教頭）。

これまで、ICT 教育を始め、さまざまな実践に意欲的に取り組まれ、実績も残してこられた。管理職になった今も積極的に、校内外の教師の指導を行っているという強者の先生である。

その細川先生を迎え、学級経営、４月～７月にこれだけはおさえたい！Vol.1「学級経営のイロハ」というテーマで会はすすめられた。

ワークショップでは、まず個人で、「曼荼羅（マンダラ）」という思考ツールを使い、学級経営で押さえるべきポイントを「問いかけ」の形式で書いていった。細川先生曰く、この「問いかけ」の形式が大事らしいのだ。問いかけることで、自分自身との対話が生まれ、新たな発想が生まれるそうだ。

その後、グループで意見交流をしながら、グループ内のメンバーとの共通事項や同じ目的であっても手立てが異なる場合など、参加したそれぞれの教師が納得、驚きを得ているようであった。

第２回目は、富山からも多数の参加者があった。また、若手教師の数も顕著に増えてきた。さらには、勤務校が同じという教師たちも何人もいた。少しずつではあるが、確実に、本年度の授業力向上ゼミの評判が、広まっていることを強く感じることができた。

第３回（6/22）天神山小学校　八崎和美教頭

八崎先生からは、「聞く・話すを育む学級経営」というテーマでお話を頂いた。

八崎先生は、数々のすばらしい授業実践を残している先生である。そのすばらしい実践を支えたのは、学級経営だといえよう。特に子どもたちが議論を繰り返し、高い次元の解を追求していく姿勢には、圧倒されてしまう。

そのような名実践を残している八崎先生から、聞く・話す力を育むプロセスを紹介していただいた。

その際に、最も強く感じたことは、教師のねらい（子どもにつけたい力）をいかにシャープにできるのかということである。八崎先生はこのねらいを極めて明確にもっている。それを支えているのは、数多くの経験だけではなく、ルーブリックという細かな評価規準である。
H教諭いわく、ルーブリックを用いることで、子どもたちの状態を明確に把握でいるようになったという。

朝の一分間スピーチから始まり、報告・発表など、それぞれの活動に応じて、明確な規準をもって臨むことで子どもたちは鍛え上げられるのだ。

参加者全員から、うなり声が聞こえるほど、すばらしいお話であった。

学級経営、4月～7月にこれだけはおさえたい！「学級経営のイロハ」

金沢市立小坂小学校　細川都司恵

1．はじめに

授業力ゼミでは、今年度毎回一人が提案し、ワークショップ形式で深めていくということになった。5月まずは学級経営ということで、『学級経営、4月～7月にこれだけはおさえたい！「学級経営のイロハ」のお題をいただき話をした。その中から3点報告する。

2．当たり前のことが当たり前にできるための指導

クラスに授業参観に入ると一番目に付くのが姿勢である。子どもの姿勢がだらしない授業は、緊張感がない。それを許す先生との関係もしかりである。「です。ます。」と最後まではっきりと言わせる、服装の乱れも授業を始める前にきちんとさせるなど、当たり前のことを当たり前にできるようにすることが学級崩壊を起こさないクラスをつくる。

また、鉛筆の持ち方が悪ければ脳より先に指や腕の神経がギブアップしてしまう。これでは中学・高校の長時間の書く学習に耐えられない。最近は、持ち方を矯正する器具が安価に売られている。遅すぎることはない。本人や保護者に話をして矯正に取り組ませることである。

3．経営アイディアを生み出すマンダラ手法

学級経営上のテーマを真ん中に書き、そのテーマについて、条件を疑問文の形で書き出し、その中から解決のアイディアを練る思考ツール「マンダラ」を紹介した。

名札・安全帽・服装などを整えているか？	姿勢はいいか？	離れたところからでも聞こえるあいさつをしているか？
シャツ出し・ズッパなどのままにしていないか？	当たり前のことってなあに？	授業の終始のあいさつがきちんとできているか？
ノートに下じきをひいているか？	学習用具がそろっているか？	静止の約束ができているか？

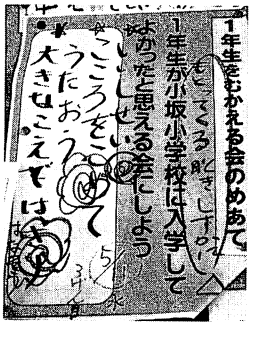
疑問文で8つまわりに書いてみるのがミソである。疑問文で書くことによって自分との対話が意識されたり、考えていることの相互の関連が見えてきたりするからである。

8つの条件からクラスで一番気になる問題を見つけ、今度はそれを真ん中に書き、同じように実現に必要な条件を8つ書き出してみる。この作業でクラスが抱える問題を解決する過程が見えてくる。ワークショップではグループでマンダラを使って、「当たり前とは？」について考えてもらい、指導方法を交流した。

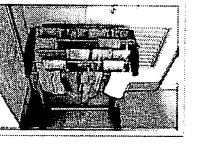
4．「見える化」の手だて

子ども達の学習の足あとや日頃の行動は見える化し、成長や努力を評価したい。そのためには掲示で「見える化」することを勧めた。

貼るだけでは「見える化」にならない。子どもが意識して見るよう一工夫が必要である。



(1) 学習履歴として残す場合は、既習のふりかえりに使う。
(2) モデルを示し、繰り返し見させる。
(3) 子どもの頑張りは見える形で残す。
(4) 活動のめあてを立てたらで必ず振り返りをし成果を明らかにする。
(5) 隠したいものは、あえて整とんして見せる。



具体的な事例をもとに、ワークショップでは「見える化」したい努力や成長について、再度「マンダラ」を使い、意見を出し合った。

5．おわりに

学級経営も組織的に取り組むことが大切である。その一翼を一人ひとりが担っていきたい。

聞くこと・話すこと

七尾市立天神山小学校　八崎和美

1．はじめに

子ども達が自由に自分の考えを出し合える学級づくりをしたい。ところが現実は、自分の考えを出すのはいいが、言葉足らずで伝わらず、受け取る側も思い込みで聞き取るのでかみ合わず、トラブルが起こることが多い。互いを尊重し合う暖かい心を育てることはもちろんであるが、同時に子ども達に「聞くこと・話すこと」のスキルをつけてやらなければコミュニケーションをとることは難しい。スキルをつけるということは評価規準を子ども達に持たせることにもつながる。そこで今回のゼミではいくつかの手立てを提案してみた。対象は高学年である。

2．これまでの問題点の洗い出し

「聞くこと・話すこと」の活動を振り返り、以下の3点が問題点としてあげられる。

●「聞くこと・話すこと」の力が本当に子ども達についていたか。「活動のための活動」になっていたのではないか。

●「聞くこと・話すこと」に関わる教師の指導方法、子ども達の学習方法が明確になっていなかったのではないか。

●「話すこと・聞くこと」の力が身に付いているかどうかの評価について、教師と子どもの観点や規準がずれていたのではないか。

3．具体的な手立て

以下の5点を手立てとして試みた。

○学級経営、教科指導のイメージ図を描き作戦を立てる。

○「聞くこと・話すこと」のスキルと型を意識させる。コミュニケーションが成立する良さを実感させる。

○「聞くこと・話すこと」を日常的に取り入れ、評価を繰り返す。

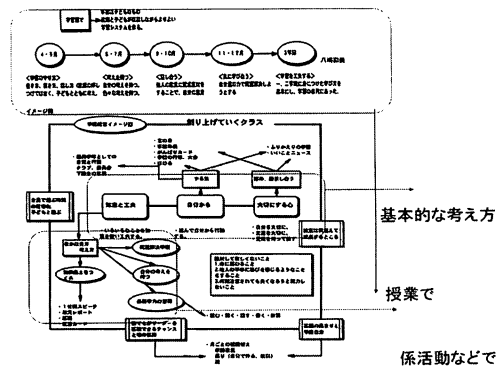
○国語科と他教科・総合的な学習・特別活動との関連を図る。

○グループワークで「聞くこと・話すこと」を生かす場を設定する。

まず教師が「聞くこと・話すこと」の評価規準をしっかり持って繰り返し評価することを通して、子ども自身が評価規準を持てるようにする。さらに子ども同士の相互評価を積極的に取り入れ、評価規準に沿って改善しようとしているかどうかを評価し、学級全体に良さを広めていく。

(1)　イメージ図を描き作戦を立てる

学級経営イメージ図」を描く。子どものクラスでの様子をイメージして具体的な手だてを考える。大切なのは子どもにその手立てが「なぜ」「何のため」かわかるように作戦を練ることである。



(2)　「聞くこと・話すこと」のスキルと型を意識させる

スピーチ、対話・問答、発表・紹介、報告・説明、話し合い・討議等の「聞くこと・話すこと」の型を国語科の授業を中心に指導する。それぞれの型の話し方、聞き方のポイントを理解させ、「場」に合わせて使えるようにしていく。

(3)　「聞くこと・話すこと」を日常的に取り入れ評価を繰り返す

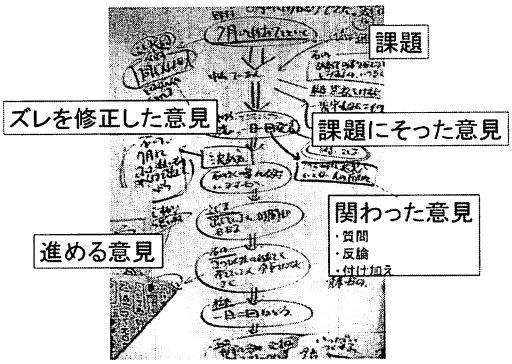
①　朝の1分間スピーチ

子どもが「話すこと・聞くこと」の評価規準を知り、使う場として設定する。スピーチ後は必ず教師が評価する。評価ポイントは、一巡目はつまらないで言えること、二巡目以降は相手を意識した工夫（出だしの工夫・具体例・共感

を呼ぶよびかけ・資料の提示など）をしていることである。三巡目からは子ども達にも評価に参加させ、子どもが使った評価規準の良さを皆で共有する。

② 授業での話し合いを可視化する

子ども達に、問題解決に向けて積み上げる話し合いのイメージを持たせるために、授業中の発言をすべて書き出す。



まず課題に即した意見を縦に書き、その意見に関わった意見、課題からそれた意見を修正した意見、次に進める意見をそれぞれのもとになる意見から派生させて書く。子どもは、誰の、どの意見が課題解決の中にどのように位置づけられるのかを理解することができ、より良い話し合いにするにはどうしたらよいのかを検討する資料になる。

(4) 国語科と他教科・総合的な学習・特別活動との関連を図る

「聞くこと・話すこと」に関わる目標を設定し、複数単元で指導する。例えば、以下の表のようにその時期につけたい力を決め、いくつかの教科を選んで構成する。

国　語	社　会	総　合	学級会
具体例を挙げて話す。	資料を使って話す。	根拠を明らかにして	提案理由を明らかにして

(5) グループワークで「聞くこと・話すこと」を生かす場を設定する

「聞くこと・話すこと」を活用する場として課題解決ができるようなグループワークを積極的に取り入れる。そのためには下支えとなる活動を準備しておくことが必要である。

① グループワークに生かすための下支え

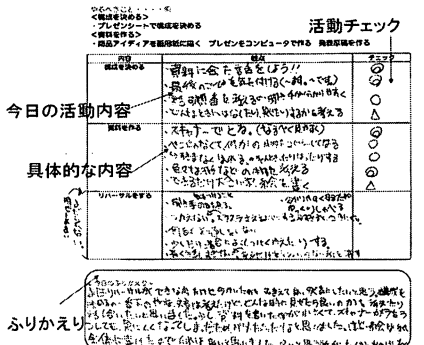
ア．まとめるための方法を指導する

ウエッビングやＫＪ法などのシンキングマップの利用が効果的である。

イ．タイムスケジュールを明確にする

いつまでに、何を、どのような状態にしておけばいいのかを明確にし、皆で共有する。ゴールを明確にすることで計画は立てやすくなる。

ウ．タイムスケジュールの見直しをする



立てた計画はこまめに見直さなければならない。できたこと、できなかったこと、やらねばならないことを活動後に明確にする。

エ．グループの仕事分担を確認する。

オ．内容の観点を明確にするためにルーブリックを利用する

効果的な表現とは、わかりやすい説明とはどのようなことなのか、を子どもと一緒に具体的な言葉にする。以下の表は、台湾の子と交流するためのホームページを作った時のルーブリックである。Ｓ～Ｃ規準を設定し、Ａ規準を学級全体で共有し、他の規準は各グループで決めた。ルーブリックはブラッシュアップするための話し合いの物差しになる。

観　点	Ａ　観　点
写真・動画を工夫している	ぱっと見て様子がわかる写真を選ぶことができる アップとルーズを使う
文字の大きさ	内容にひきつけるような色や大きさに書くことができる 見出しごとに色を変える
コメントを短くまとめる	ぱっと見て内容が理解できる文を書くことができる 一文にまとめる
見出し・小見出しの工夫	何が書かれているか見ただけで予想できる 色分け、大きさを変える

3．終わりに

子どもに「聞くこと・話すこと」のスキルをつけるのは、コミュニケーションを成立させるためである。そのために、子どもが自分の聞き方、話し方を見直し、より良いものにしていくためのよりどころを持たせることが大切である。

子ども一人一人に明確に評価観点をもたせるには？

2年国語科「説明のしかたを考えよう～昔遊びの説明DVDづくり～」実践を通して

金沢市立緑小学校　海道朋美

1．6月の八崎実践を聞いて

6月の八崎先生の実践報告を聞きながら「子どもに評価観点をもたせることの大切さ」を考えていた。「子ども自身が、めざす姿をイメージできて、何をどうすれよいのかわかればやる気になる」と八崎先生。この「何をどうすればよいのかわかること」が学びの中心ではないかと気づかされ、「子ども一人一人に明確に評価観点をもたせるには？」という切り口で実践を振り返ってみた。

2．実践の概要

(1) **単元名**　昔遊びの説明DVDをつくろう
　教材名　説明のしかたを考えよう（光村）

(2) **学習のねらい**

・伝えたいことを相手のことを考えて、工夫して伝えようとする。
・絵（映像）と言葉を工夫して、わかりやすく説明することができる。
・順序を表す表現を用いて説明することができる。

(3) **学習の流れ**

一次【学習のめあてと見通しをつかむ】
　（来年の）1年生のために、
　　昔遊びの説明DVDをつくろう！
二次【説明のしかたを学ぶ】＊教科書モデルで
　①　説明書通りにけん玉をつくってみよう
　②　説明のわかりやすさを見つけよう。
三次【昔遊びの説明映像をつくる】
　①　教えたい昔遊びと担当グループを決める。
　　（3人×11グループ）
　②　遊び方説明書を書く。
　③～⑥　説明練習、撮影、視聴、改善、仕上げる。
　☆1年生に視聴してもらい改善点をきく。
四次【学習をふりかえる】
　①　自分や友だちの成長をふりかえる。

3．本実践での評価観点のもたせ方

本実践では、第三次【説明映像づくり】において、1年生にわかりやすく伝えるには何をどうすればよいのか、作品を相互評価し改善する過程で、その評価観点も見つけ見直しながら進んでいった。

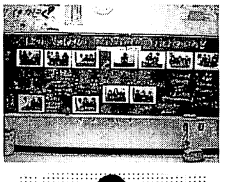
初めの子どもの意識は【はっきりした声で、姿勢よく】というもので、説明内容への観点がなかった。そこで、最初の相互評価は気づきを自由記述させて、話し方や姿勢以外の言葉使いや見せ方への気づき等が表出できるようにし、それをもとに評価観点を考える時間を設定した。その結果が次の4観点である。

①【話し方】1年生がわかるはやさ
②【ことば】キーワードをはっきり
③【見せ方】だいじなポイントを見せる
④【しせい】ふらふらなし。かっこよく

さらにこの観点の見直しが迫られた。それは現1年生に作品を視聴してもらったところ、黒板いっぱいの改善点が伝えられたのである。伝えたつもりが伝わっていない、見せたつもりが見えていないことの「自覚化」により、【言葉】【見せ方】への意識が変えられ、【ことば】は「1年生にわかる言葉か」、【見せ方】は「（見る人が）集中できる見せ方か」子どもが観点を見直し変えていった。

4．単元構想の中でさらに工夫を

作品づくりの過程でその出来具合を「自覚化」する仕掛けが子どもの評価観点の質を高めることを実感した実践だった。さらに、今回はできなかったが、二次【モデルから学ぶ】この学びを評価観点づくりのスタートすることや、四次【学習のふりかえり】で評価観点を取り上げて学び（内容）をふりかえるなど、単元を通した仕掛けが考えられる。子ども一人一人にどのようにどのような評価観点をもたせるのか。単元構想のみならず1年間の見通しの中で考えたい重要な切り口であることを学んだゼミだった。



4つの視点から思考力・表現力を育む授業デザインを検討する

金沢市立小坂小学校　小林祐紀

1．はじめに

研究会のテーマである「思考力・表現力」の育むためには、授業デザインに4つの視点を、取り入れる必要があると感じている。

それは、「必要感のある最終ゴール」「個別の学習機会」「解釈や評価の視点」「協同学習の場」である。

以下、4年国語科『「伝え合う」ということ‥資料：手と心で読む…』の授業をもとに4つの視点で論述する。

2．単元計画（総15時間）9月上旬～10月上旬

学習計画を立てる・資料の範読・感想を書く（1）
資料の内容読解・点字体験（1）
テーマ（2つ）の決定（1）
図書資料・映像資料を使って調べ学習（2）
個人のニュース原稿の作成（2）
グループで1つのニュース原稿にまとめる（3）
発表の練習（1）
中間発表のための撮影（1）
相互評価（1）
最終の発表練習と本番の撮影（1）
鑑賞会と学習のまとめ（1）　※括弧内は字数

3．必要間のある最終ゴール

本単元では、保護者を相手に、点字について伝えるニュース番組をつくることにした。ニュース番組という明確な目標を掲げたこと、伝える相手を保護者にしたことで、高い学習意欲を持続できた。また、最終ゴールが明確なため、各時間ですべきことも必然的に明らかになってくる。さらに学習計画を掲示したことで、子どもたちの意識は毎回ぶれることはなかった。

4．個別の学習機会

思考力を育むためには、建設的な議論を行い、ある水準の解を導きだす過程（協同学習の場）が必要である。

しかし、そのためには、個人の「強い思い」や「知識・技能」などの土台がなければ、議論は深まらない。そこで、個別の学習の機会を保障することが重要になる。一人一人が一生懸命考えることで、「こだわり」が生まれ、知識・技能が定着するのである。

本単元では、ニュース原稿を一人一人が書くようにした。この学習場面を難しいと感じる子どもは多い。だからこそ、さまざまな支援を行う。以前に、実践したときの完成作品を聞かせたり、本物のニュースを聞かせたりした。また、やりとりが生まれる文頭の書き方を確認した。

5．解釈や評価の視点

議論がかみ合うように、議論が深まるように、解釈や評価の視点の共有を行った。

本単元では、個人原稿を書く際に指導した文頭（さっそくですが、そうなんですか、ところで、実はなど）は、他者の原稿を読んだときの評価の視点も兼ねている。また、グループ内で原稿を、初めて回し読みをする際には、「良い表現」や「良いまとめ」に赤線を引かせた。個人原稿を書き終えたことで「良い」の中身は程度の差こそあるが、大体は共通理解できていた。

6．協同学習の場

この過程を通して、大きく子どもたちは成長する。必死で考え、自分の思いを伝えるからだ。

さらに、協同学習はニュース原稿を読む練習場面でも見られる。みんなで声を掛け合いながら、より良いものにしていく際には、やはり考え、思いを伝えることが大事なのだ。

7．まとめ

単元終了後に学習アンケートを実施した。また、15時間の授業の感想を書かせた。調査結果や子どもたちの感想からも、達成感が確認できた。また4つの視点への評価値もいずれも高かった。

したがって、「必要感のある最終ゴール」「個別の学習機会」「解釈や評価の視点」「協同学習の場」という4つの視点は、思考力・表現力を育む授業デザインを考えた際に、欠かせないものだといえる。

生活科における思考力を育む授業構想

金沢市立小坂小学校　室本眞希

1．はじめに

生活科で培いたい「思考力」とは、子どもが経験することによって得られる様々な「気付き」を、新たな自分の創造に役立てられるように「質的に高める力」ではないかと考えている。

気付きの質を高めるために、3つの視点を取り入れて授業をデザインしていくことが有効だと感じている。それは、「活動の意図的な繰り返し」「表現により思考を深める」「ルーブリックの作成によるタイムリーな評価と支援」である。

以下、1年生活科「ぐんぐんそだて、あさがおさん」の授業をもとに3つの視点について説明する。

2．活動の意図的な繰り返し

本単元ではアサガオのたねを植えてから、秋にたねを取るまで長期にわたり栽培活動を行う。毎日水やりをする中で、子どもたちは自然に観察し、その成長にも気付くであろう。

しかし、気付きはあっても、それを質的に高めるためには、その気付きをもとに思考する場を教師が設定することが必要である。

そこで双葉が出た時、双葉が開いた時、本葉が出た時、つるが伸び始めた時など、期を逃さずに観察カードに記入させる。意図的に繰り返し観察し、気付きを交流することで、子どもたちは「双葉とは形のちがう葉が出てきた」(比較する)、「くきに毛が生えたよ」(見つける)、「ハートみたいな葉がある」(たとえる)といった多様な思考活動を何度も行うことになる。意味のある繰り返しの中で、思考を深める姿を教師が価値づけることにより、気付きを高めることができた。

3．表現により思考を深める

活動の多い生活科では、やりっぱなしではなく、活動で得た思いを文章で表現したり、発表したりして振り返ることが大切である。

前項2で述べた観察カードの記入・蓄積も、「観察」という活動を言語化して表現させ、評価することで、子どもたちが無自覚だった気付きを自覚させているのである。また、振り返りを発表する場面でも、互いの気付きを交流することで、表現により思考を深めることができる。

この単元の終末では、あらかじめ教師が撮影しておいた成長過程の写真を何枚か渡し、グループで成長順に並べ替えさせた。その時にあえて似たような成長段階の写真を入れておくことで、「比べたら葉の数が多いからこの写真が後だよ！」「くきが太くなってるから後だよ」と、子どもたちの飛び交う言葉が格段に増えた。じっくり写真を見比べ、映像と言語を往復させながら考えを構築していたからであろう。思考と表現の一体化である。

4．ルーブリックの作成によるタイムリーな評価と支援

活動主体の授業では、活動後の振り返りを評価するだけでは十分に気付きの変容を見取れないことがある。そこで活動場面での子どもの具体的な姿を想定して思考ルーブリックを作成し、行動を観察することで、活動中の児童の気付きの変容を即座に見取ることができ、その場で適切な支援や評価を行うことができた。アサガオの育ちを「比較する」場面では、“アサガオの変化を複数捉え相違点を指摘している”姿をB規準とし、到達していない子には、比べる視点を与えたり、対話で気付きを引き出したりするなど支援を行った。

5．まとめ

単元が進む毎に、子どもたちの観察カードには言葉が増え、アサガオと他の花の育ちの共通点や相違点を見つける子や、"植えたたねと花が落ちた後に取れるたねは同じだ"という自然の事象にまで気付く子が何人もいた。このことから、これら3つの視点は、思考力を育む授業デザインを考えた際に、効果的だといえる。

考えるための視点を持たせる５つの方策

～ 算数科「分数のかけ算」～

金沢市立田上小学校　井上智映子

１．はじめに

６年算数科「分数のかけ算」では、連乗や四則演算の混ざった問題が出題される。これらは、かけ算のきまりを使えば簡単に計算できるのに、そのまま複雑な計算をする子は多い。それは、きまりを理解できていないか、そもそも簡単に計算しようと考えていないからではないか。

そこで式を見たらまず観察して簡単な計算方法を模索する目を養いたいと考えた。

２．実践内容

(1)　考えを生み共有する下準備

交換・結合・分配法則は分数のかけ算でも成立することを確認するプリントを作成し事前に行った。考えを発表するとき、「プリントでしましたが、かけ算は入れ替えても答えが変わりませんね。」と用いられていた。

(2)　教師の評価で観察を促す

「どこから計算すると『は(やく)』『か(んたんに)』『せ(いかいくに)』か」という課題で $\boxed{(7/8\times5/6)\times6/5}$ をノートに書かせた。

予想通り大半の児童が（　）から計算していた。そこで、机間巡視をしながら、$\boxed{(7/8\times5/6)}$ から計算していたら「なるほど。」など軽く受け止め、$\boxed{5/6\times6/5}$ から計算していたら「へえ～！」など驚嘆・称賛の声をかけるようにした。

この２種類の声かけをきっかけに、子どもたちは答えの求め方に目を向けるようになった。求め方に着目してから発表したので、考えの違いや良さをすぐ確認することができた。

(3)　良さを体感させる

きまりを用いて計算してほしいので、便利かどうかを議論するより、良さを実感できる問題を用意した。$\boxed{(23/45\times1/99)\times45/23}$ のように交換法則を使えばすぐ答えが分かる問題だ。

全員が交換法則を用いる方法を選んだ。また、出題途中で問題の先を予想する子も出てきた。法則を用いる良さを実感したこと、式を観察する目が育っていることを感じられた。

(4)　いろいろなパターンに出会わせる

早く解けた児童から類似問題を作るよう指示した。すると大きな桁の分数や、何回も何回もかけ続ける計算を作っていた。この活動で、交換法則の素晴らしさを楽しむと同時に、交換法則を用いる問題は数も種類もたくさんできる事に気づけた。

次に、$\boxed{3/4\times5+3/4\times7}$ と結合法則を用いる問題を出した。$\boxed{3/4\times(5+7)}$ とした子に対し、「なんでそうするの」と質問が出た。小さな数の約分が楽、整数のかけ算になるから楽だと理由を聞いても、腑に落ちない顔をした子が多かった。そこで $\boxed{3/7\times6+3/7\times\square}$ の□にどんな数が当てはまるか考えさせた。□を類推することで「そういうことか！」と $\boxed{6+\square}$ が７(分母)の倍数になるというからくりに気がつけたようだった。

(5)　整理する

きまりを用いて計算ができても、意識的に行っているかはわからない。授業の終わりに何に目をつければ計算が『はかせ』になったかたずねると、どう説明すればよいか分からない様子だった。目をつけた数を指でさし、それらがどんな数か話し合うことにした。

交換法則の場合は、かけると１になる数、分母と分子がひっくりかえっている数だと言った。それを受け「約分ペア」と名付けることにした。結合法則も同じように話し合い、かけ算をまとめることができないか考えることを確認した。

このように目のつけどころを言葉に表したことで、２つの法則の違いや式を観察する視点が明確になった。

３．まとめ

学習の様子や授業のふりかえりから、子どもには(3)の良さと(4)の問題作りが強い印象を残したことがわかった。新しい思考パターンを育むには、それを使う良さを実感させ、さらに自分のツールとして習熟させる場の設定が授業デザインにおいて大切だと私は考える。

「教室に１台」の電子黒板　２年目の挑戦！

中能登町立鳥屋小学校　布川かほる

１．各クラスに1台の電子黒板

昨年度のこのページで、「教室に１台」の電子黒板が活用できるように、教師も子どもも「触れる・慣れる・使える」の段階から始め、電子黒板があること、使うことが当たり前の状態をつくっていることをご報告しました。今年度は研究の２年次にあたり、昨年の研究の次のステップをめざして進んでおります。

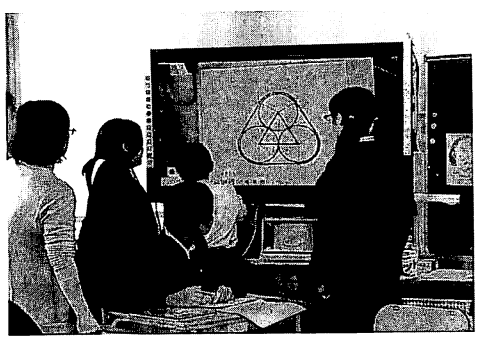
昨年度の研究では、「学び合い」の段階で自分の考えを伝えるために電子黒板を活用する有効性が見えてきました。そこで今年度は、その２年次にあたり「学び合う子どもたち～電子黒板の活用を通して、思考を深める・広める～」の主題のもと研究に取組んでおります。自分の考えを伝え合う「学び合い」の授業設計の中で、「教室に１台」の電子黒板をどう活用し、子どもたちにいかに思考力をつけることができるか研究しております。

２．グループで・クラス全体で・教師の出場で

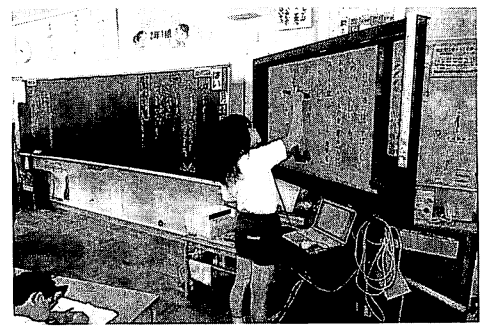
「学び合い」の中で電子黒板を活用する場面として３つ考えられます。

１つは、グループで考えを伝え合う場面、２つめは、クラス全体で考えを伝え合う場面、３つめは、「ゆさぶる・焦点化する」などといった教師の出場で使う場面です。

授業設計の段階で、子どもの実態に応じたりやねらいに迫ったりするために電子黒板を活用する３つの場面のどれを設定するか考えることにしました。そうしていく中で、「教師だけが使える電子黒板」という意識から、「どう子どもが活用していけるか」という意識に変える必要が先生方の中で生まれてきたように思います。



３．慣れる・使える・活用できる



子どもたちが、自分の意図をもって電子黒板を活用できる段階にまで育てるために、「慣れる」「使える」「活用できる」の３段階の系統表を作成しました。

例えば、電子黒板上のコンテンツのボタンをクリックするなどの「慣れる」から線や図をかき込むなどの「使える」へ、そして示したり比べたりする資料を自分で提示し、適宜拡大縮小するといった意図をもって「活用できる」などです。これらを低・中・高学年の見通しをもってできるように現在取組んでおります。

４　思考力を育むことへ

「教室に１台」の電子黒板を「学び合い」にどう活用することで思考力の育成につながるのか、現在実践検証中です。研究についてたくさんのご意見をいただけるよう10月13日㈭には、研究発表会を開催します。たくさんの参観者とともに「学び合い」や「教室に１台」の電子黒板について深め合う機会としたいです。たくさんのご参加をお待ちしております。

フューチャースクール実証研究報告

金沢星稜大学　村井万寿夫

1．はじめに

総務省は教育分野でのICT利活用を推進することを目指し、主に情報通信技術面を中心とした課題の抽出・分析を目的として、平成22年度より「フューチャースクール推進事業」に着手した。

その一環として「東日本地域におけるICTを利活用した協働教育の推進に関する調査研究」と「西日本地域におけるICTを利活用した協働教育の推進に関する調査研究」に係る実証研究を行うことになった。

私は「東日本地域におけるICTを利活用した協働教育の推進に関する調査研究」の全体委員会（中川一史委員長：放送大学）の副委員長、兼北陸地域協議会（実証研究校：内灘町立大根布小学校）座長の立場から調査研究と実証研究に携わっている。

2．「協働教育」とは

フューチャースクール推進事業を展開するにあたり総務省は「ICTを利活用し、児童がお互いに学び合い、教え合う教育」を協働教育と定義している。そして、これを実証研究校（全国１０小学校）において実証したり、協働教育を実現するための課題を見出したりすることが東日本地域（５小学校）と西日本地域（５小学校）において求められているのである。

3．ICT環境の整備状況

実証研究校においては、以下のICT環境が整備されている。

①　タブレットPC

１年生から６年生までの全ての児童に一人一台のタブレットPCが貸与されている。

②　インタラクティブ・ホワイト・ボード

各普通教室に１台ずつのインタラクティブ・ホワイト・ボードが配備されている。実証研究校においてはIWBと略称で呼んでいる。

③　校内無線LAN

普通教室や特別教室（理科室など）でタブレットPCを使ってデータをやりとりしたり、インターネット検索したりすることができるよう、校内無線LANが整備されている。

④　協働教育プラットホーム（教育クラウド）

次の３つの事柄をそれぞれに実現させるとともに、３つのことをまとめて実現できるプラットホームを構築してある。

- 学校独自のポータルサイトやメーリングシステム、校務支援システム、学校評価システム等の統合。
- デジタル教科書やデジタル教材等の管理・共用。
- ICTサポート（ICT機器の操作支援、障害時の対応ヘルプデスク機能、セキュリティ対策など）の集中化。

4．実証授業の特徴

東日本地域の５小学校で実践された169事例をもとに６つの授業タイプに分類されている。

①　**クラス共有**：タブレットPCで表した考えをIWBで説明する授業（68事例）。

②　**グループ共有**：一つのワークシートにグループで意見を書き込む授業（34事例）。

③　**制作**：「もぞう紙アプリ」を用いて新聞を作ったり、カレンダーや安全マップを作ったりする授業（16事例）。

④　**収集**：インターネットで調べ学習を行ったり、サーバからタブレットPCに送られた資料で調べ学習を行ったりする授業（14事例）。

⑤　**習熟**：タブレットPCでドリル学習やキーボード練習を行ったりする授業（32事例）。

⑥　**交流**：インタビューしたり、調べ学習の結果を相手に伝えたりする授業（５事例）。

これらのことから、実証研究校においてはIWBとタブレットPCを組み合わせた協働教育が多く実践されていることがわかる。

iEARN2011 International conference in Taiwan に参加して

金沢星稜大学　清 水 和 久

1. iEARN とは？

iEARN（アイアーン：International Education and Resource Network）は、世界130カ国・地域、30言語、300プロジェクト、2万6千人の教員、200万人(2010年10月現在）の生徒が参加する教育 NGO（非営利事業組織）である。この世界大会が今年は7月18日から1週間、台湾の高雄で開かれた。石川県の教育工学会からは「アートマイルプロジェクト（国際共同壁画制作）の発表として、3本の発表（金沢市立浅野川小：西野先生、金沢市立木曳野小：角納先生、星稜大：清水）があった。

2. 開会式

毎年開会式では参加国の名前が呼ばれ、今年は日本からは50人あまりの教師や生徒が参加おそろいの T シャツでアピールした。他の国もお国柄が分かるグッズでアピール。

図1　木の靴を持ったオランダチーム

開会式の参加国のコールでは、毎回たくさんの国（今回は38カ国）から先生方が集まって来ているのかと感動し、この会議を通して、先生同士が個人的につながり、教育について話しあい、そして子ども達をつなげる共同プロジェクトの打ち合わせができるすばらしさを感じる。

3. 各国の報告から

どの先生もプロジェクトを実施することで子ども達の交流国に対する関心が高まり、伝えるための英語の必要性やグローバルな視野から物事を見る重要性に気づいたという報告があった。ただ、同時に活動時間の捻出には気をつかっているようで、台湾の場合も正規の授業時間内ではプロジェクトの時間がとれず、どうしても放課後の時間を利用せざるを得ないと言っていた。それに対して、日本は総合的な学習の時間という「正規」の時間があるので、他から見れば恵まれており、せっかくの時間を子ども達の興味関心を大事にしながら、大きな視点で物事を見られるように、世界との関わりの中で展開していく必要があると感じさせられた。

今回、会議に参加したり発表したりすることで名前入りの「参加証明書」や「発表証明書」を発行してもらった。外国ではこれが当たり前であり、先生方にとってはこのような会で発表することは価値があることであり、自分のキャリアの証明として使われるようである。日本ではあまり重要視されませんが、参加する先生方には「実績」という意味もあるのだと思う。

4. ユースの参加について

先生方の会議と平行して中高生のユースの会も別メニューで開催されていた。日本からも20人あまりの中高生が参加していたが。高校生の1人に感想を聞いてみると、「英語で自分の思いを伝えられたことが一番楽しかった」と答えてくれた。彼らは、学校で IEAERN のプロジェクトに参加しており、授業で習っている英語が、意志を伝える手段であることを改めて実感していたようだ。

次世代をになう若者に、このようなプロジェクトを通して「伝わる喜び」「協働で学習する喜び」をぜひ味わってもらいたい。そのためにも iEARN のプロジェクトに取り組む学校が増えることを願っている。iEARN にはり、たくさんのプロジェクトが紹介されていおり、ぜひ参考にされたし。

URL　http://www.iearn.org/

iEARN 2011 世界大会 in TAIWAN で得たもの

金沢市立浅野川小学校　西 野 聡 子

1．参加のきっかけ

3年前、石川県教育センターで内地留学をさせていただき、小学校英語教育を学ぶ目的意識と相手意識を、外国の小学生と英語を使って友達になるためという形で、具体化することを学んだ。母語を英語としない児童同士が、英語を学ぶ必要感の伴う交流学習のすばらしさを実感した。交流のおもしろさは、児童だけが味わったのではない。私自身も、交流相手の学校の先生とメールでやりとりをしながら、自分の思いが外国の方に伝わる充足感をもつことができた。

その年に、交流相手校を訪れ、生徒達や担当の先生方から非常に温かい歓迎を受けた。その時から台湾台南市志開國民小学校の子ども達と先生方は、私の生徒に英語を学ぶ目的をもつための大切なパートナーとして、位置付いたのである。その国での iEARN 大会である。ぜひまた訪れ、交流相手の先生にお会いし、あの時たいへんお世話になったこと、多くの場面で助けられたことのお礼を言いたいと思った。わたしにとって、大会への参加は、出会った人へ感謝の気持ちを表すことが目的となった。

2．開会式での感動

次々と呼ばれる参加国の名前。初めて参加した私は、国境を越え、こんなに多くの教師や生徒達、教育に携わる方々が一堂に集まること自体に大きな衝撃を受けた。参加国全ての方々に大きな拍手が送られる。その国からたった一人での参加の方、台湾やオーストラリアのように大勢の方々での参加、開発途上国から、先進国から。各国の考え方が違うことで大きな課題を抱えている世界情勢の中、この一週間全員が同じ目的を同じ価値観で、熱く語り合い、お互いの思いや考えを伝え合い、認め合う。こんなすばらしいひとときに、2日間だけでも参加できたことに感謝したいと思った。同時に日本は、そして自分のこれまでの実践は、世界の方々から見てどう映るのか、あと1日となるが、「この2日間を大切に過ごそう。」と期待と緊張の、引き締まる思いをもった。

Pray for Japan の T シャツで参加をアピール

3．各国の報告と日本の報告

多くの実践を見ることはできなかったが、それぞれの国のさまざまな教育事情の中で、同じことをめざし努力をされていることが伝わった。「子ども達が、学ぶことを楽しく意欲的に行う姿を大切に考えたい」「教師は、平和で地球の命をみんなで守る意識を大切にしながら、子ども達が心豊かにたくましく生きていく姿をめざしている」日本の教育と何も変わらない、やり方はさまざまであっても、ゴールは同じだと、ロビーや食事の場での雑談で、本当に嬉しく熱い気持ちになった。

自分の報告は、帰国後に組まれていた予定日の変更により、日本のチームの温かい参加と、再会した台湾の先生に対する報告となった。そのため、「楽しみと意欲をもって英語力をつける取り組み」に対しての感想を頂くことはできなかったが、2日間の参加の中、参加国の先生方の教育への熱い想いと、注ぐ時間と理解を得る努力をされている話から、私も負けずに前へ進んでいこうと誓えたことが嬉しかった。

そして、初めての参加や、トラブルへの誠意溢れる温かい対応、時間をつくって再会してくれた台湾の友人達と協力してくれた台湾の先生。改めて出会いと人との繋がりの素晴らしさを感じ、私もそれを次へ繋いでいきたいと思った。

iEARN Conference in Taiwan

金沢市立木曳野小学校　角納裕信

1．幸せは最後にやってくる

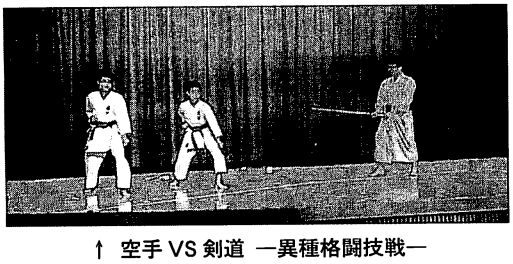
今回の会議に出席した私の目的は、三つありました。一つはプレゼンを成功させること、二つ目は、カルチュラルナイトデビュゥを果たすこと、三つめは、台湾限定で交流相手校を見つけてくることでした。三つめの交流相手校を見つけるのには、難航しました。話が弾んだと思ったら、実は中学校の先生であったり、学校が変わったばかりで、新しいプロジェクトを言い出しにくい、であったり…。日本語を話せる目の大きな「ちほ」という名前の先生に声をかけましたが、あえなく撃沈しました。しかし最後の最後に何とか手応えを得たのです。しかも先ほどの先生よりかわいい先生です。

2．プレゼン→反省→ICoME に生かす

プレゼンは、失敗でした。どこがどう失敗であったかは、詳細は語りませんが、一人反省をして次の韓国でのプレゼンにその経験を生かそうと思います。それにおなかも痛かったのです。

3．カルチュラルナイトデビュゥ

一昨年のモロッコでの会議では、沖縄尚学の学生さん達が琉球空手を披露してくれました。日本人がみると（失礼ですが）たいしたことないように感じられるのですが、西洋人の皆様にはミラクルに見えるようです。そうであるなら、と密かに今度会議に出席する際には空手 VS 剣道の異種格闘技をプロデュースしようと考えていたのです。予想通り大変うけていたようです。



↑ 空手 VS 剣道 ―異種格闘技戦―

4．モロッコ会議と比較して

先程、モロッコ会議の話が出ましたが、私は2009年に、モロッコーイフランというところで開催された会議に出席してきました。そのときは初海外プレゼンということもあり、ほどよい緊張感から、なかなか上手くいったように思います。英語で笑いもとり、オゥディエンスにちゃんと目線も配れましたので。ところが今回は、全く英文から目を離すことが出来ませんでした。そんな負い目が自分にあるからなのでしょう、モロッコの方が活気があって、新鮮で、異文化体験も思う存分に出来て、積極的に外国の先生にも日本の先生にも話しかけて…ということが自分でも出来、充実した一週間でした。それに比べると、もちろん自分自身の中の問題だと思うのですが、心に映るもの一つ一つがなんだか寂しいのでした。台湾の若い世代が頑張って創り上げている様子を見て、嫉妬したのも多分にあると思うのです。ですから、企画運営は台湾の方が数段上であると思います。要するに自分自身にどのように映ったか、自分の問題なのです。えぇ、分かっているのです。

5．17年前の台湾と比較して

貧弱バックパッカーだった頃、アジアを中心に学習塾でお金を稼いでは、出かけていきました。台北にも行きました。タクシーひとつ乗るにも値段交渉で気の休まる暇がありません。ヘッドレストを蹴り上げたこともありました。お金が掏られやしないかと不安で仕方がありません。両替も、町中で指をすりあわせながら「チェンジ？」と言って向こうから声をかけてきます。それに比べたら、何ともゆるゆるです。メーター通りの値段しかタクシーは取りません。お金どころか、パスポート出しっぱなしです。闇両替は見つけるのが難しいです。道を普通に渡れます。せいぜいバイクは３人乗りまでです。（前は５人乗っていた！）あぁ、複雑です。

夏に鍛える

で鍛える

思考力。

D Project

実践発表　10：15～

D-pro型思考力を授業デザインに取り入れた実践提案が目白押し

社会：布川かほる（中能登町立鳥屋小学校 教諭）
国語：西田　素子（金沢市立犀川小学校 教諭）
国語：佐藤　幸江（横浜市立高田小学校 主幹教諭）
算数：本岡　　朋（和歌山市立藤戸台小学校 教諭）
体育：中西　優登（金沢市立森本小学校 教諭）
理科：水由　尚己（金沢市立金石町小学校 教諭）

鼎談（てい）　15：10～

3人がそれぞれの立場から本日の研究会をまとめます。

中川　一史（放送大学、D-project 会長）
村井万寿夫（金沢星稜大学、石川県教育工学研究会副会長）
小林　祐紀（金沢市立小坂小学校 教諭、D-project金沢実行委員長）

オープニングトーク　10：00～

D-projectの考える思考力とは何か!?
中川会長が分かりやすく語ります。

ワークショップ　11：30～12：00，13：00～

思考力を育む授業デザインを体験しよう!

A：iPad授業活用ワークショップ
講師／本岡　朋（和歌山市立藤戸台小学校 教諭）
B：新聞制作ワークショップ
講師／佐藤幸江（横浜市立高田小学校 主幹教諭）
C：図工ワークショップ
講師／谷本克典（金沢市立押野小学校 教諭）

エンディングトーク　16：00～

本日の総括コメント
清水　和久（金沢星稜大学、石川県教育工学研究会副会長）

総合司会：西野　聡子（金沢市立浅野川小学校 教諭）

つくろう！ニホンの教育フューチャー！

D-project in 金沢 2011

テーマ「思考力を育むための授業デザイン」

2011年8月6日(土) 10:00 ～ 16:10

会場：近江町交流プラザ

D Project
www.d-project.jp

共催：デジタル表現研究会、石川県教育工学研究会
後援：石川県教育委員会、金沢市教育委員会、学習ソフトウェア情報研究センター
当日、受付にて資料代５００円をいただきます。

参加申し込み・詳細は
http://www.d-project.jp/2011/hokuriku/2011ws.html

平成23年度 石川県教育工学研究会役員名簿

（順不同　敬称略）

【会　　長】 岡部　昌樹（金沢星稜大）

【副 会 長】◎西田　政人（小坂小）　◎村井万寿夫（金沢星稜大）　◎加藤　隆弘（金沢大）
清水　和久（金沢星稜大）

【代表理事】 西出　隆　中村　孝雄　紙谷　威　山本　昌猷　清丸　亮一
谷内　敏夫　藤井　昭久　北本　正明　押野　市男　大森　俊彦
南　千之　山崎　副

【理　　事】 〔◎は常任理事〕
（加賀地区）◎荒谷　実（作見小）　◎吉田　博（国府小）　◎宇都宮　博（小松工業）
向出　章（那谷小）
（金沢地区）西田　政人（小坂小）　◎菖蒲田英夫（東明小）　中條　敏江（松陽小）
細川都司恵（小坂小）　濱田美恵子（四十万小）　畠　一馬（加賀聖城）
山下　雅美（外日角小）
（能登地区）◎坂井　善久（小丸山小）　◎荒巻　雅博（鵜川小）　八崎　和美（天神山小）
山下　匡（みさき小）

【運営委員】 〔○は研究部〕
（加賀地区）畠山　久雄（錦城養護）
（金 沢 市）奥野　豊夫（米丸小）　中島　満子（木曳野小）　○青江　弘義（西荒屋小）
金岡　弘宣（金大附小）　濱坂　昌明（紫錦台中）　○小林　祐紀（小坂小）
○角納　裕信（木曳野小）　○中野　淳子（御園小）　升田　敦士（兼六中）
山本　秀紀（内灘中）　樫田　豪利（金大附属高）　渡辺　直人（松陽小）
（能登地区）中西　英一（羽咋小）　笹川　修栄（越路小）　○布川かほる（鳥屋小）
○岩崎　京子（小丸山小）　松本　豊（高浜小）　板岡　有子（邑知中）

【事務局長】○飯田　淳一（清湖小）

【事務局次長】○清水　和久（組織担当：金沢星稜大）　○坂上則子（企画担当：四十万小）
○海道　朋美（会報担当：緑小）

【研究部長】○細川都司恵（小坂小）

【研究副部長】 山下　雅美（外日角小）　小林　祐紀（小坂小）

【会　　計】 清水　和久（金沢星稜大学）

【会計監査】 濱田美恵子（四十万小）　奥野　豊夫（米丸小）

【日本教育工学協会役員】
（研究会理事） 岡部　昌樹

【顧　　問】 柳田　勇　山崎　豊　吉田　貞介

【指導委員】 太田　雅夫　小笠原喜康　金子　劭榮　黒上　晴夫　黒田　卓　坂元　昂
堀田　龍也　大野木裕明　水越　敏行　山西　潤一　山極　隆　吉崎　静夫
赤堀　侃司　鈴木　克明　清水　康敬　堀口　秀嗣　中川　一史　稲垣　忠

石川県教育工学研究会　会 計 報 告

平 成 22 年 度 決 算

収　入

科　　目	本年度予算	本年度決算	備　　考
会員負担金	342,000	342,000	会費3,000円×114人
県補助金	400,000	400,000	
賛助会費	60,000	0	30,000×2社
雑収入	150	157	銀行利子など
合　　計	802,150	742,157	

支　出

科　目		本年度予算	本年度決算	備　　考
補助対象経費	謝金	60,000	60,000	講演会謝金(講師代)
	旅費	120,000	140,000	全国大会３名　富山大会５名
	消耗品	45,000	6,710	タックシール インク代
	印刷費	300,000	283,500	会報79，80号、研究紀要
	図書費	100,000	100,000	支部活動費、研究用図書、資料代
	事務連絡費	0	0	
	通信運搬費	85,000	70,610	会報、研究紀要郵送費
	借上費	10,000	0	施設利用謝礼
	計	720,000	660,820	
補助対象外経費	賃金	40,000	40,000	事務局事務員（村井さん）
	組織加盟金	20,150	20,120	日本教育工学協会会費、送金手数料
	諸会合費	17,000	15,217	諸会合費（大会昼食費）
	web 維持費	5,000	6,000	レンタル sakura サーバー
	計	82,150	81,337	
合　　計		802,150	742,157	

本年度収入合計	本年度支出合計	次年度繰越
742,157	742,157	0

平 成 23 年 度 予 算

収　入

科　　目	予　算	備　　考
会員負担金	456,000	4,000×114人
県補助金	400,000	
賛助会費	30,000	
繰り越し	0	
雑収入	0	
合　　計	886,000	

支　出

科　目		予　算	備　　考
補助対象経費	謝金	60,000	講演会謝金（講師代）
	旅費	200,000	全国大会（丹波）６名、富山大会（２名）
	消耗品	45,000	発送用封筒、DVD-R、タックシール
	印刷費	300,000	会員名簿、会報81，82号、研究紀要
	図書費	100,000	支部活動費、研究用図書、資料代
	事務連絡費	0	
	通信運搬費	85,000	会報、会員名簿、研究紀要郵送費
	借上費	10,000	
	計	800,000	
補助対象外経費	賃金	40,000	事務局事務員（村井さん）
	加盟分担金	20,000	日本教育工学協会会費、送金手数料
	諸会合費	20,000	諸会合費
	サーバー維持費	6,000	
	計	86,000	
合　　計		886,000	

平成23年度　石川県教育工学研究会事業計画

事　　業	期　　日	概　　要
1　総　　会	5月29日(日)	平成23年度総会（於：金沢市教育プラザ富樫） ・平成22年度事業報告・決算報告 ・平成23年度事業計画・予算案
理　事　会	24年3月4日(日)	平成23年度理事会（於：金沢大学） ・平成23年度事業報告・決算中間報告 ・平成24年度事業計画・予算案 ・平成24年度役員案
2　研究事業	5月29日(日)	○講演会・学習会「デジカメのプロをめざそう ～映像表現力を育成する指導方法を身につける～」
	6月6日(月)	○講演会・学習会「国際交流学習会」 講師：JICA　塩井美帆　氏 会場：金沢星稜大学
	8月6日(土)	○夏の研究会「思考力を育むための授業デザイン」 会場：近江町市場一番館　　共催：デジタル表現研究会
	8月	○第38回全日本教育工学研究協議会全国大会（金沢大会）に向けての組織会・運営委員会
	10月	○学習会「確かな授業設計について」
	11月17，18日	○第37回全日本教育工学研究協議会全国大会　丹波大会 6名発表予定
	12月23日(金)	○講演会「アートマイルセミナー」 会場：金沢21世紀美術館　　共催：金沢市教育委員会
	24年2月	○北陸3県教育工学研究会 富山大会
	24年3月4日(日)	○平成23年度石川県教育工学研究大会 会場：金沢大学
3　刊行事業	4月、6月、8月、10月、12月、3月	○研究会ニュース 年間を通じ当会 Web サイト http://i-kougaku.undo.jp/ にてニュースを掲載しています。）
	7月、3月	○会報（81号、82号、B5版、24頁、200部）
	3月	○第37号研究紀要（A4版、68頁、200部）

編集後記

会報81号をお届けいたします。

今回の会報では、北陸三県教育工学研究大会（3月）での全体会テーマでもあった「今、求められる学力」について、学校現場での様々な取り組みとそれを支える研究会の様子を載せることができまししした。

お忙しい中、執筆頂いた先生方、本当にありがとうございました。

【会報担当】

会費納入についてのお願い

研究会の円滑な運営のため、会費納入をお願いします。　　**年額　4,000円**

振込先　北國銀行 高尾支店　普通 110292

平成23年8月1日発行

発行者　石川県教育工学研究会
代表者　岡部　昌樹
事務局　〒920-1192　金沢市角間町
金沢大学人間社会学域学校教育学類
附属教育実践支援センター
TEL 264-5588　FAX 264-5589
印刷所　㈱小林太一印刷所
TEL 238-5454　FAX 238-5453